

女性の世代別性差意識の比較に見る教育の役割

The Educational Role in terms of the Comparison of the Gender
Consciousness among Different Generations of Women

青木幸子（東京家政大学栄養科）

Sachiko AOKI (Tokyo Kasei University)

要 旨

男女の固定的な役割分担を見直すために、教育の果たす役割は大きい。教職をめざす学生が制作した「教育カルタ」を活用し、女性の世代別（中学生・大学生・成人）性差意識を把握するとともに、そこで得られた知見をもとに効果的な学びの方法について考察した。

その結果、世代間に異なるジェンダー意識が確認された。大学生がジェンダーにもっとも敏感であり、中学生がもっともジェンダー・バイアスに囚われていた。カルタ教材は、さまざまな学びとりができ、世代を超えた汎用性が認められた。また教育の方法としてディスカッションが効果的であることが確認された。

Abstract

Education plays an important part in taking a new look at the fixed sexual division of roles. I have tried to grasp the characteristics of the gender consciousness among different generations (junior high school students, higher education students and adult), and at the same time have examined the role of education based on the knowledge obtained from them by utilizing educational cards 'Karuta' manufactured by the students who aim at the teaching profession.

The result is as follows:

1. It is confirmed that there are different grades of gender consciousness among generations.
2. It is confirmed that university students are most sensitive to gender, and junior high school students are bound strongly by gender bias.
3. It is confirmed that the educational benefit brought about by 'Karuta' lies in the suggestion of the possibilities of various ways of learning.
4. It is confirmed that the discussion as an educational methods is very effective.

キーワード：女子差別撤廃条約、性差意識、世代間ギャップ、教育カルタ

Key words : convention on the elimination of all forms of discrimination against women, gender consciousness, generation gap, educational cards 'karuta'

1. 問題の背景と研究の目的

「女子差別撤廃条約」の締約国には条約の実施状況について報告義務が課されている。2008（平成20）年に提出された第6回報告書に関して、国連女子差別撤廃委員会の最終見解が2009（平成21）年に示され、それを踏まえて「第3次男女共同参画基本計画」が2010（平成22）年に策定された。この基本計画の策定に当たって、政府は、意識啓発の段階から課題解決の段階への移行という施策の転換を強調しており、施策に具体的な数値目標を設定することで実効性のあるプランをめざしている⁽¹⁾。

たしかに女子差別撤廃条約の批准以降、我が国における役割分業意識には確実な変化が見られた。しかし、内閣府の「男女共同参画社会に関する世論調査」（2012.10調査）によれば、各分野における男女の地位の平等感は、学校教育の場が67.0%ともっとも高く、次いで自治会・NPOなど地域活動の場52.1%、家庭生活47.0%、法律や制度上45.4%、職場28.5%、社会通念・慣習・慣行など21.4%と平等意識に差が見られる。それぞれの分野の平等感はいずれも微増傾向にあるが、

あらゆる分野において男女平等意識の啓発と慣習・慣行の見直しが課題であることが分かる⁽²⁾。

また、内閣府の「地方公共団体における男女共同参画社会の形成又は女性に関する施策の進捗状況（平成24年度）」によれば、男女共同参画に関する条例の制定状況は、千葉県を除いた46都道府県で制定されており、制定率97.9%である。一方、市区町村では政令指定都市を含め523市区町村で制定済み（30.1%）であり、条例の制定を検討中であるのは260市区町村（14.9%）、検討していないのは957市区町村（55.0%）にのぼる⁽³⁾。このような地方公共団体による取り組みの温度差は、男女共同参画に対する国民の温度差ともなっていないだろうか。「男女共同参画社会基本法」（1999）には、国、地方公共団体、国民の果たす責務が謳われ、その責務を果たすことで男女共同参画社会の構築をめざしている。

こうした状況を踏まえて策定された「第3次男女共同参画基本計画」の重点分野の一つに「男女共同参画を推進し多様な選択を可能にする教育・学習の充実」がある。そこには「固定的性別役割分担意識を解消し、人権尊重を基盤にした男女平等観の形成を図り、男女

表1 世代別カルタ札の選択傾向

	選択者5名以上の札数	選択者4名の札数	選択者3名の札数	選択者2名の札数	選択者1名の札数
女子中学生	5	2	4	4	8
女子大学生	0	3	8	11	11
成人女性	7	6	3	3	12

共同参画についての理解の深化を促進するため、学校、家庭、地域、職場など社会のあらゆる分野において、相互の連携を図りつつ、男女平等を推進する教育・学習の充実に資する」と記されている。

人の価値観は長い生涯を通じてどのように変容していくのであろうか。一般に物事を弾力的・多面的・複眼的に解釈して価値観を形成していくことができる年齢層と、固定的役割分担意識の強い影響を受けて形成された価値観の下で一定の行動様式に慣れ親しんできた年齢層とでは、女子差別撤廃条約の内容に対する解釈や見解も異なるものと推察される。年齢層による特徴を探ることは、生涯に亘り人間らしい安定した生活を送るために、日常生活から社会システムにいたる課題に対するきめ細かな政策展開（木本他；2010、伊藤；2003、佛教大学；1999）へのヒントを提供してくれることも期待される⁽⁴⁾。

そこで、価値観の形成に大きな役割を果たす学校教育で学ぶ年齢層として中学生と大学生を、形成された価値観に基づいて社会生活を営んできた社会教育で学ぶ年齢層として成人を対象に、世代間のジェンダー意識の特徴とその背景について探り、学校教育、社会教育のそれぞれが果たす役割とカルタ教材の汎用性について検討することを目的とする。

2. 研究の方法

筆者は、教職課程を履修し教員をめざす学生を対象に、女子差別撤廃条約や男女共同参画社会基本法について理解を深め学生のジェンダー観の涵養に努める一方、中・高校生の男女平等意識の涵養を目的に『男女平等を考える教育カルタ』を学生とともに制作した。なおカルタは、本紀要第6集に誌上再現している。

このカルタは、中学校、高等学校、大学の授業や成人向け講座において、ジェンダー意識啓発のための教材として活用されている。すでに、それらの活用実態について一部公表している（青木他；2010、2011a、2011b、2012）⁽⁵⁾が、本稿では、それらを総合し、未公表内容も含めて分析することにより、女性の世代別ジェンダー意識の特徴をより鮮明にし、今後の啓発活動への知見を得ることを目的とする。

なお、ベースとなる調査は次のとおりである。

女子中学生：2009年2月6日～27日、83名

女子大学生：2009年12月～2010年1月、69名

成人女性：2010年6月、9月、10月、90名

3. 「カルタ」札の選択傾向

全44枚のカルタの中から「もっとも気になったカルタ」として選ばれた札は表1のとおりである。中学生が同一の3枚の札（「け；結婚は二人の気持ちが第一です」に14名、「ら；ランドセル男子は黒女子は赤何でかな」に11名、「や；止めさせたい発展途上国の児童婚」に8名）に集中する傾向が見られたのに対して、成人は「わ；分かってほしい介護の負担7割以上が女性です」に7名、「き；急な解雇母になっただけなのに」「は；肌の色や性別は違っても人の価値は変わらない」に各6名と中学生ほど集中する傾向は見られないものの、共通の札を選択する傾向があることが分かる。それに比べて大学生は分散傾向にある。

そのような傾向の中で、世代を超えて共通に選ばれた札がある。各世代3名以上が選んだ札の一覧を表2～4に示した。太字で記した3世代に共通する札は3枚（「お；お父さんの育児休暇増えたらいいな父子手帳」「き；急な解雇母になっただけなのに」「ら；ランドセル男子は黒女子は赤何でかな」）、網掛けで示した2世代に共通する札は5枚（「は；肌の色や性別は違っても人の価値は変わらない」「へ；変じゃない同じ仕事でも男女で違うお給料」「ほ；僕の夢は看護師さん私の夢はパイロット」「も；もう悩まないでパートナーからのドメスティックバイオレンス」「ゆ；許さない男だから女だからもう差別」）である。

一方、共通する札以外の札からも性別役割分担を見直そうとする世代の意識を読み取ることができ、過去の経緯と今後の生活への展望を想像しながら選んでいることが推測される。

4. 「カルタ」のコラムによる学びの傾向と特徴

カルタ絵札の裏にあるコラムを読んで、どのようなことを学び取っているのかを世代別に示した結果が表

表2 中学生の選択札

	標 語	選択者
け	結婚は 二人の気持ちが 第一です	14
ら	ランドセル 男子は黒 女子は赤 何でかな？	11
や	やめさせたい 発展途上国の 児童婚	8
せ	洗濯機 今日回すのは お父さん	5
も	もう悩まないで パートナーからの ドメスティックバイオレンス	5
ほ	僕の夢は看護師さん 私の夢はパイロット	4
り	リクルート やめてほしい 男性びいきの面接官	4
う	運命だとあきらめないで アフガンの女性に 生まれたことを	3
お	お父さんの育児休暇 増えたらいいな 父子手帳	3
き	急な解雇 母になった だけなのに	3
ゆ	許さない 男だから 女だからは もう差別	3

表3 大学生の選択札

	標 語	選択者
へ	変じゃない？ 同じ仕事でも 男女で違うお給料	4
め	目指そう！女の子だって高校球児	4
ら	ランドセル 男子は黒 女子は赤 何でかな？	4
い	育児の役割 パパもママも 一緒だね	3
お	お父さんの育児休暇 増えたらいいな 父子手帳	3
か	家庭の味 お袋の味 親父の味	3
き	急な解雇 母になった だけなのに	3
ぬ	ぬぐいさろう 男は社会 女は家庭の考え方	3
は	肌の色や性別は違っても 人の価値は変わらない	3
ほ	僕の夢は看護師さん 私の夢はパイロット	3
も	もう悩まないで パートナーからの ドメスティックバイオレンス	3

表4 成人の選択札

	標 語	選択者
わ	分かってほしい 介護の負担 7割以上が女性です	7
き	急な解雇 母になった だけなのに	6
は	肌の色や性別は違っても 人の価値は変わらない	6
あ	あなたなら 結婚後の名字 どうします？	5
そ	尊重しあい思いやる みんなでめざす 差別ゼロ	5
ふ	夫婦は一つ 個性は二つ 権利はいくつ？	5
や	やめさせたい 発展途上国の 児童婚	5
お	お父さんの育児休暇 増えたらいいな 父子手帳	4
へ	変じゃない？ 同じ仕事でも 男女で違うお給料	4
み	みるみる昇格同期の彼 私はみるみるお局様	4
ゆ	許さない 男だから 女だからは もう差別	4
ら	ランドセル 男子は黒 女子は赤 何でかな？	4
ろ	労働条件見直して 仕事できるのに 地位低迷	4
ち	調理実習 おいしい理由は 男女で一緒に作るから	3
つ	常に優先 子どもの幸せ それが親の務めです	3
ま	まだまだ眠る 女性の能力 可能性	3

表5 コラムによる世代別の学び

選択者		意思表示	気づく	考える	分かる	感想 総計
		自らの意識・ 行動・課題・ 疑問など	驚き・ ショックなど	世界・国・ 企業・環境整備 などの対応	同意・ 現状追認・ 寄り添う心	
女子中学生 n = 79	件数	42	26	12	18	98
	割合	42.9	26.5	12.2	18.4	100
女子大学生 n = 69	件数	24	13	34	24	95
	割合	25.3	13.7	35.8	25.3	100
成人女性 n = 90	件数	44	8	30	31	113
	割合	38.9	7.1	26.5	27.4	100

5である。横軸には、日本家庭科教育学会の分類⁽⁶⁾に倣いながら、記述内容の特徴を表す項目を設定した。表中の上段はコラムに対する感想の記述件数、下段は全体に占める割合を示した。

中学生は、意思表示>気づく>分かる>考えるの順に、大学生は、考える>意思表示=分かる>気づくの順に、成人は、意思表示>分かる>考える>気づくの順に学習効果を評価している。世代によりコラムを通した学びには特徴があることが分かる。また、コラムに対する一人当たりの感想も大学生1.38、成人1.26、中学生1.24であり、僅かながら大学生が複数の学習効果について言及している実態が確認された。これはカルタが個人の発達段階や経験、興味関心などに応じてさまざまな学習効果を誘導することができる教材であることも裏づけている。コラムは、個人の既習内容や体験に応じて、新たな気づきや考える機会を誘発したり、また自らに置き換えて課題や行動への指針を確認したりする契機となっている。コラムによる学習効果は、自らの人生経験とカルタの標語そしてコラムを重ね合わせた結果の学びとりであり、人生の履歴が学びとる観点に大きな影響を与えていることが推察される。

同じ観点の学びでも、世代によって異なることは、表6のとおりである。

5. 世代別のジェンダー意識

カルタを活用した授業や講座の後に同一項目による意識調査を行い、世代ごとの性差意識の特徴を把握した結果を表7に示した。調査項目は、江原由美子氏による「性差意識調査」⁽⁷⁾を援用し、筆者による1項目を加え41項目とした。各項目について、「そう思う」「どちらかといえばそう思う」「どちらかといえばそう思わない」「そう思わない」の順に4・3・2・1の得点を与えた。得点が1点に近いほどジェンダーに敏感であること、4点に近いほどジェンダーバイアスが強く、

ステレオタイプのロールモデルを支持する傾向にあることを意味する。

(1) 性差意識の分布

表7には、41項目について世代ごとの性差意識の平均値と世代間の最大・最小値の差が0.5以上ある項目についてその得点差を記した。最大値には網掛けを施し、最小値は太字で表記した。また、表8には平均値の得点分布と人数をまとめて示した。

表8から全体の意識傾向を知ることができる。平均値の得点分布の上段はジェンダーに敏感であることを、中断は「どちらかといえばそう思わない」と「どちらかといえばそう思う」の間を揺れ動く意識状況を、下段は固定的な性別役割分担を容認する傾向が強いことを表している。それぞれの項目数からみて、もっともジェンダーに敏感であるのは大学生であり、揺れ動く意識状況にあるのは成人であり、固定的な性別役割分担を容認する傾向にあるのは中学生である。しかし、平均値が2.01～3.00までの得点圏にどの世代も半数以上の項目が占めていることは共通している。

そこに占める項目の傾向を表7からみると、男女の個人的な能力や体力、職業、子育てなどに関する項目(x1、2、3、4、5、10)は男女平等であるべきだとする意識は世代を超えてかなり定着していることが分かるが、外見(x23、29)や出産に伴う役割の遂行(x31、33)、さらに慣習・慣行としての男女の役割・行動様式や性格特性に関する項目(x26、28、32、34、35、36、37、39)については受容する意識傾向が強い。

さらに、世代間の平均値の差から意識傾向をみると、個人の生育環境や学校教育制度、その後の人生経験や現在の社会状況等の影響を受けて意識形成されていることが容易に推察される。

(2) 個人差の傾向

各項目の偏差値を比較すると、偏差値1以上を示

表6 コラムのよる世代別学びの具体例

世代	具 体 例
中学生	<ul style="list-style-type: none"> ・ 日常では当たり前と思いがちのことをよくよく考えてみると、こんなに疑問があるんだと気づいた。いろいろ考えられて楽しかった。 ・ 男女によって色が決められていないと初めて知った。固定観念というのは離れにくいんだと思った。 ・ 教育カルタをやってみて、女性に不利な問題が多いと思いました。男と女、性は違うけど同じ人間なので、どちらが有利とかはないと思います。お互いの意見はきちんと言ったほうがいい。今日はこのカルタをやっていると考えさせられ、とても自分のためになりよかったです。 ・ このカルタを通して男女平等を目指しているが未だ100%実現できていない現状を知れてよかったです。これから世界的規模で男女平等を考えていかなければならないことがよく分かりました。 ・ 法律で定められているのに法律を破らなければならないそこまでの理由とは何なのかなと思いました。 ・ 法律で平等にされていても、実際に平等でなければ意味がないと思いました。 ・ 男女差別がない国になってほしいと思いました。頑張ります。 ・ 人のことを差別する人間にはなりたくないと思った。 ・ 私もできることは少しずつやっていきたいと思いました。 ・ 私たちはまだ女性と男性の差別が少ないほうだと分かり、日本に生まれてよかったと思いました。今、私たちは教育的、政治的にほぼ平等の扱いを受けていますが、そうじゃない女性もいる。それはとても悲しいことであり、一人の人間として権利が尊重されるべきだと思いました。 ・ カルタで学べて楽しかったし、裏面の解説を読んでみるといろいろ書いてあって勉強になりました。カルタの内容も結構濃く、考えさせられるようなものでよかったです。 ・ 授業でやったことやってないことについてもみんなの意見を聞くことができ、あらたな発見があった。人それぞれ違う考え方を聞いてよかったです。
大学生	<ul style="list-style-type: none"> ・ 普段の生活の中で気づかない当たり前だと思っていたことが差別であったり、途上国で5歳までしか生きられない現実や児童婚の背景を知り、国により格差がある現実が悲しいと思いました。 ・ アフガニスタンが戦争状態にあることを改めて実感、まだ人身売買の国があることを知ってびっくりした。 ・ 売春・買春の事情が分かり、同じ女性として心が痛む。もっと絶対的な力による解決策はないだろうか。 ・ 学習権宣言を初めて知った。学習権が保障され、貧困から開放されるよう働く環境を創りだすことも課題となる。 ・ 労働環境を整備する必要性を痛感した。また、ランドセルの色は固定観念だと分かった。 ・ 企業側の雇用意識に疑問を感じる。女性に対する考え方を改め、男女とも能力を活かす社会となるよう環境づくりが必要である。男女同一賃金になるよう社会全体で努力を。また、すべての競技を男女平等にすべきである。 ・ 法律や制度ができて、それに違反しているのがおかしいと気づく人が増えて、初めて均等法が浸透したといえる。 ・ 人身売買をしないための対策、介護は社会全体でを念頭に制度と組織づくりを進めていく必要がある。 ・ 性による役割遂行の見直し、性差で教育内容や進学先、職業まで制約されるのを北欧諸国を見習い平等を目指すべきである。 ・ 固定観念に囚われた社会から可能性を伸ばす社会への転換が望ましいが、固定観念は急に崩せるものではないので、どう広め、浸透させていくかが課題だと思いました。 ・ 被害届を勇気を持って出す、家事の協力の必要性、法律と現実のギャップを埋める努力が必要だと思う。 ・ 介護も育児同様男女が協力して行う、DVに対する理解など、若い世代の私たちこそ平等への意識を持ち、取り組んでいく必要があると思います。 ・ 子どもより自分を優先する親の個人主義が目立つ。自分が親になったときこの句を念頭に、親としての責任と義務を果たし、幸せを共有できる関係を築いていきたいと思います。 ・ カルタを通して世界の現状や差別環境、さまざまな問題を考えることができるともよかった。 ・ カルタの標語一つ一つに深い意味があり、どのカルタも納得するものばかりでした。とても楽しく勉強になった。 ・ 男女平等や人権に対して真剣に向き合うよい機会になった。グループワークは他の人の意見を聞くことで、自分のジェンダー観を整理することができてよかったです。
成人	<ul style="list-style-type: none"> ・ カルタがおもしろかった。一人ひとりの意識の向上で平等な社会が創れたらいいと思う。 ・ カルタの裏面に感心しきり。楽しく学ばせていただきました。 ・ カルタを作った学生さん達とその後社会に出て、実際に体験したことを反映したカルタを作ったら面白いだろうなと思いました。 ・ カルタづくりは自分の考えをまとめるのに役立った。 ・ 普段から男女共同参画を意識していないとカルタ創りは難問だということが発見できました。 ・ まだまだ男女格差は根強く、個人レベルの意識だけでは変えられない。政治、政策、社会環境すべてを変える必要を感じました。 ・ 学生の方が作ったカルタと聞き、これからの日本を創っていく基礎となる子どもたちを教育する人たちに希望を見出すことができました。 ・ グループワークで互いに意見を交換し合っ共同作業をするカルタ作りは、とても楽しく有意義でした。 ・ 自分の中にもまだ固定観念にとらわれていると思ったし、日本のGGIの指標が低く、課題が多いことに気づきました。

しているやや個人差がみられる項目数は、中学生 21、大学生 3、成人 24 である。3 世代に共通する個人差の大きい項目は 2 項目 (x9、32) であり、個人差の少ない項目は 9 項目 (x5、10、11、12、13、16、18、21、33) である。平均値が低くても偏差値が高いのは個人間の意識の振幅が大きく、両者とも低いのは意識傾向

が比較的一定していることを意味している。

個人差があることはジェンダー観をリセットする余地が大きいとも考えられるが、世代間による違いはあると推測される⁽⁷⁾。学習環境、生育環境、職場環境、家庭環境などジェンダー観のリセットを迫られるような場面に直面したり、実際にリセットした経験の有無

表7 性差意識の分布—世代別得点の平均値と偏差値

記号	項目	女子中学生 (n = 83)		女子大学生 (n = 69)		成人女性 (n = 88)		平均値差
		平均値	偏差値	平均値	偏差値	平均値	偏差値	
x1	知的な能力は個人差より性差の方が大きい	1.45	0.91	1.25	0.67	1.58	1.00	
x2	クリエイティブな仕事にも性差はある	1.61	1.01	1.33	0.72	1.60	1.02	
x3	体力を要しない大部分の仕事でも、 男女に能力の差はある	1.77	1.11	1.65	0.82	1.69	0.99	
x4	男性に家事や育児の能力は必要でない	1.43	0.77	1.23	0.43	1.80	1.04	0.57
x5	男はおしゃれに気を配る必要はない	1.65	0.85	1.54	0.58	1.84	0.92	
x6	男は背が高くなければ、と思う	2.89	1.07	2.13	0.91	1.94	1.08	0.95
x7	女性は男性に比べ臆病だ	2.11	0.88	1.71	0.88	1.97	1.12	
x8	中学生になると男の子が成績の方が伸びる	1.93	0.97	1.52	0.72	2.23	1.10	0.71
x9	女性は男性に比べ手が器用である	2.53	1.10	2.16	1.07	2.14	1.12	
x10	体力において男性が勝る以上、社会のあらゆる場で 男性が優位な地位を占めるのは止むを得ない	1.99	0.97	1.61	0.79	1.80	0.97	
x11	男性は女性に比べ人を使うのが上手である	2.08	0.98	1.65	0.70	1.88	0.99	
x12	女性の優れた思想家はあまり出ない	2.04	0.94	1.87	0.87	2.07	0.94	
x13	セックスにおいて男性がリードするのは当然である	2.81	0.92	2.28	0.86	1.93	0.94	0.88
x14	女性は何かにつけて責任を回避しがちである	2.22	1.03	1.86	0.81	2.24	0.99	
x15	女性は視野が狭い	1.93	1.03	1.49	0.74	2.18	1.01	0.69
x16	論理的思考は男性の方が優れている	1.99	0.92	2.07	0.93	2.32	0.95	
x17	子どもを他人に預けてまで母親が働くことはない	2.16	1.05	1.93	0.88	1.94	0.99	
x18	女性は出産する可能性があるため男性と仕事の上で 互角に並ぶのは無理である	1.87	0.97	1.91	0.74	2.24	0.99	
x19	女性が入れたお茶はやはりおいしい	2.45	1.00	2.07	0.91	1.86	1.01	0.59
x20	将来、マラソンなど持久力を競う種目においても、 女性は男性と肩を並べるとは思わない	2.22	1.05	2.74	0.98	2.28	1.12	0.52
x21	女性は体力や精神力の点でパイロットなど人命を 預ける仕事には向いていない	1.84	0.89	1.72	0.82	2.23	0.99	0.51
x22	男性は女性に比べ攻撃的である	2.54	1.06	2.03	0.94	2.35	1.07	0.51
x23	たくましい精悍な体つきは、男の魅力として重要である	3.01	0.80	2.67	0.83	2.16	1.00	0.85
x24	冒険心やロマンは、男の究極のよりどころである	2.51	0.92	2.14	0.86	2.32	1.06	
x25	家庭のこまごました管理は女性でなくては、と思う	2.34	1.07	1.90	0.84	2.16	1.13	
x26	男性の性欲は概して女性に比べて強い	3.06	1.00	2.68	0.92	2.52	1.05	0.54
x27	最終的に頼りになるのは、やはり男性である	2.57	1.04	2.00	0.92	2.18	1.05	0.57
x28	女性は月経があるので精神的に不安定である	2.65	1.05	2.51	0.87	2.56	0.95	
x29	女性の美はそれだけで十分価値がある	2.65	1.09	2.51	0.96	2.25	0.96	
x30	一家の生計を支えられないような経済力のない 男性は男として失格である	2.81	1.01	2.42	0.95	2.08	0.93	0.73
x31	子育てはやはり母親でなくては、と思う	2.43	1.08	1.94	0.86	2.24	1.02	
x32	女が人前でタバコを吸うのは好ましくない	3.16	1.10	2.64	1.04	2.42	1.13	0.74
x33	子どものことよりも自分のことを優先して考える ような女性は、母親になるべきではない	2.92	0.95	2.80	0.78	2.44	0.95	
x34	男はむやみに弱音を吐くものではない	2.69	1.05	2.03	0.86	2.08	1.00	0.66
x35	女性は男性に比べ感情的である	2.82	0.98	2.41	0.90	2.56	0.93	
x36	男の生理からして売買春はいつの時代もなくなるらない	2.77	1.06	2.43	0.93	2.47	1.06	
x37	男は強くなければ、と思う	3.29	0.86	2.57	0.92	2.38	1.03	
x38	女性は子どもを産めば母性愛が自然にわいてくるものだ	3.24	0.97	2.71	1.02	2.58	1.12	0.66
x39	人前では妻は夫を立てた方がよい	2.55	0.99	2.54	0.95	2.53	0.98	
x40	男性と女性は本質的に違う	3.02	0.98	2.83	0.94	2.91	1.13	
x41	「男は仕事、女は家庭」の考え方に賛成である	1.92	1.08	1.57	0.74	1.83	1.02	

表8 平均値の得点分布と人数

得点	女子中学生 (n = 83)	女子大学生 (n = 69)	成人女性 (n = 88)
1点台	12	18	13
2点台	23	23	28
3点台	6	0	0

などが影響すると考えられる。

(3) 因子分析による項目間の関連

表7の性差意識の結果に基づいて因子分析を行い、5つの因子を抽出することができた。各因子には因子を構成する項目から特徴を表す名称を付与し、さらに因子を構成する各項目の得点を合計し、因子群の平均値を求めた結果を表9に示した。

3世代ともジェンダー意識が比較的高いのは「能力的平等性」に関する因子4で、中学生1.54、大学生1.52、成人1.70である。「女性性の劣等性」(中学生・大学生; 因子2)や「体力と男性性の優位性」(成人; 因子3)についても反対する意識が強い。それに対して、性差に基づく行動特性や固定的役割分担を強調する因子群については、ジェンダー・バイアスとの葛藤状態にあることが平均値から窺われる。

(4) 性差意識の醸成とリセットへの課題

同一のカルタ教材や調査項目によって得られたデータを分析し、世代別の特徴を把握してきた。その結果、ジェンダー意識は大学生がもっとも高く、成人、中学生の順に低下していく。その実態を裏づけるのは、性差意識調査の得点分布であり、世代間の得点差である。

しかし、調査結果を個人差の視点からみた場合、中学生と成人はジェンダー観をリセットする余地が大学生に比べて大きいことが分かった。ジェンダー観の醸成やリセットという意識啓発には、学齢期である中学生への啓発は学校教育に、成人には社会教育としての取り組みがいつそう期待される。

しかし、学校教育におけるジェンダー教育の推進には温度差がみられる⁽⁸⁾。価値観の形成に係る学齢期の学びには、さまざまな見方、考え方に触れ、自ら気づき、考え、行動を通して体得する学びが重要である。また、さまざまな知識と経験の蓄積の上に修正を繰り返して形成されてきた成人の価値観のリセットには、学齢期とは異なる手立てが必要であろう。それは、成人の場合、これまで直面してきたさまざまな環境場面の影響を強く受けているからである。

それでもなお両者に共通する手立てとして、他者との意見交換が重要であることは、授業や講座の感想か

ら実感として理解することができる。さまざまな実態を知り、課題に気づき、自ら考え、事象に対して意見を持ち、行動を起こすというプロセスは共通であると思われる。一人ひとりが自らの人生を切り拓いていくために、どのようなライフスタイルでワーク・ライフ・バランスの実現を図っていくのか、その意志と自覚と行動力を育成することで男女共同参画社会の構築に向けて歩を進めることができる。

今日、学校教育においては思考力・判断力・表現力等の活用する力の育成がめざされているが、これらの能力の育成に言語活動は不可欠である。「第3次男女共同参画基本計画」に謳われた男女平等を推進する教育・学習を充実するために、家庭科は固定的な性別役割分担意識の解消を起点として、男女共同参画社会の構築に向けた意志と自覚と行動力を育てていく役割を担っている。個人の価値観に揺さぶりをかけるような授業構成と授業展開が望まれる。カルタ教材は、そうした視点からも年齢層を問わず多様な学びを創出する一助となりうることが明らかになった。

6. 要約

「第3次男女共同参画基本計画」の実効性を高めるためにも、教育の果たす役割は大きい。固定的な性別役割分担意識を見直し、男女共同参画について正しく理解し、それを実行に移していくためにはまだ越えなくてはならないハードルが多くある。意識啓発のための教材として制作された「教育カルタ」による学びから、世代別の特徴と効果的な学びの方法について以下の知見を得た。

- ①カルタ教材の内容への関心は、大学生がもっとも高く、成人、中学生の順に低下していく。
- ②カルタのコラムから学び取った内容について、中学生は意思表示>気づく>分かる>考えるの順に、大学生は考える>意思表示=分かる>気づくの順に、成人は意思表示>分かる>考える>気づくの順に、その学習効果を評価している。つまり、カルタは学び手の発達段階や問題意識、興味関心、経験などから多様な学び取りができることを裏づけている。
- ③性差意識調査結果から、性差意識は中学生、成人、大学生の順に高くなる。また、成人は大学生に比べて固定的な役割分業意識は強いが、個人差も大きいのが特徴である。それは、今日まで積み重ねてきた人生の履歴によって形成された価値観によるところが大きいと思われる。さらに、3世代に共通しているのは、能力的平等を志向しながらも、セクシュアリティに基づく役割分担への束縛という慣習・慣行

表9 因子分析による尺度得点の比較

因子	女子中学生	平均値	女子大学生	平均値	成人女性	平均値
1	固定的行動特性	2.99	身体的特性と役割同調	2.30	固定的役割期待	2.51
2	女性性の劣等性	2.00	女性性の劣等性	1.87	男性性の強調	2.14
3	女性・母親役割の強調	2.38	男女の生理・行動的特性	2.15	体力と男性性の優位性	1.97
4	能力的平等性	1.54	能力的平等性	1.52	能力的平等性	1.70
5	男性役割の強調	2.92	母親役割の強調	2.49	男女の発達と性向特性	2.24

から逃れることの難しさとの葛藤があることが明らかになった。

④生涯にわたって仕事と生活の調和を図っていくために、あらゆる世代が男女共同参画について理解と実効力を高めるよう意識的に取り組む必要がある。学齢期の生徒・学生を対象とした授業においては自らのジェンダー観に揺さぶりをかける働きかけが効果的である。また、成人を対象とした講座においては自らの履歴を振り返り現状と対峙しながら生活を見直すとともに、次世代に向けたシステムづくりを着地点とする解決の仕方に特徴がある。世代によるジェンダー観のリセットも、自立に向けたリセットと次世代への夢を繋ぐリセットというように異なる傾向がある。

⑤このような現状においては、先ず足元の家庭生活、職場、地域社会での慣習・慣行を見直すべく、身近な分かりやすい事例からの意識啓発が必要である。その意味からもカルタ教材は老若男女に親しみやすい教材であり、学習効果の汎用性も確認することができた。グループワークなどの学び方をはじめ、コラムの内容を充実することでさらなる学びの効果を高めることができ、男女共同参画社会の構築に向けて教育の果たす役割への期待にも応えることができると考える。

注

- (1) 内閣府男女共同参画局. 第3次男女共同参画基本計画策定に当たっての基本的な考え方(答申)(平成22年)(<http://www.gender.go.jp>)
内閣府男女共同参画局. 第3次男女共同参画基本計画, 2010 (http://www.gender.go.jp/about_danjo/basic.../kihonkeikaku.html)
- (2) 内閣府男女共同参画局. 「男女共同参画社会に関する世論調査」, 2012 (<http://www8.cao.go.jp/survey/24h/24h-danjo/1.html>)
- (3) 内閣府男女共同参画局. 「地方公共団体における男女共同参画社会の形成又は女性に関する施策の進捗状況(平成24年度)」, 2012 (<http://www.gender.go.jp/research/index.html>)

- (4) 木本喜美子・大森真紀・室住眞麻子編著. 社会政策のなかのジェンダー. 明石書店, 2010
伊藤公雄. 男女共同参画が問いかけるもの, インパクト出版会, 2003
佛光大学総合研究所編. ジェンダーで社会政策をひらく. ミネルヴァ書房, 1999.
- (5) 青木幸子・崇田友江. 女子中学生のジェンダー観の涵養と教育カルタの効果. 日本家庭科教育学会誌, 54(4), 2012, 258-266.
青木幸子. 男女共同参画社会の構築とその課題—成人女性の性差意識の特徴と課題—. 東京家政大学博物館紀要 第16集, 2011b, 59-68.
青木幸子. 「教育カルタ」の教材としての汎用性—世代別女性のジェンダー意識の分析—. 日本家庭科教育学会第54回大会研究発表要旨集, 2011a, 62-63
青木幸子. 「教育カルタ」の教材としての汎用性—大学生と中学生のジェンダー意識の分析—. 日本家庭科教育学会第53回大会研究発表要旨集, 2010, 34-35
- (6) 日本家庭科教育学会編「全国調査からみた家庭科の学習効果と家庭科カリキュラムへの提言」において採用された分析手法を参考にした。ここでは、小・中・高校生を対象に実施した全国調査の項目のうち、家庭科の学習を通して児童・生徒が習得している能力の分析において、「気づく」「考える」「分かる」「できる」の4つの観点から回答を求め、家庭科学習で培う能力の特徴を分類し、カリキュラムへの提言を行っている。
- (7) 江原由美子. 男子高校生の性差意識. 藤田英典編・黒崎勲・片桐芳雄・佐藤学(編)ジェンダーと教育. 世織書房, 1999, 196.
- (8) 木村涼子編. ジェンダー・フリー・トラブル—バッシング現象を検証する. 白澤社, 2005
木村涼子・小玉亮子. 教育/家族をジェンダーで語れば. 白澤社, 2005
直井道子・村松泰子編. 学校教育の中のジェンダー—子どもと教師の調査から. 日本評論社, 2009